

### 大隅神社境内（おおすみじんじゃけいだい）

大隅神社は大己貴命・少彦名命を祭神とする神社です。当初は現在地から 900 m 東方にありましたが、元和 6 年（1620）、津山藩主森忠政が津山城の鬼門守護神として丹後山の東端にあたる現在地に移転しました。

現在の本殿は、貞享 3 年（1686）、第 4 代藩主森長成により建立されたもので、境内には、市指定重要文化財である本殿、神門、昭徳館のほか、玉垣、石灯籠、狛犬、手水鉢、幟立石などがあります。

玉垣は、最も古いもので安政三年（1856）のものがあり、市内にある神社の中では最も古く、幕末から明治初期にかけてのものがまとまった状態で保存されており、奉納した人物の詳細な出自が判明するものも多くみられます。

また、境内にあるその他の石造物（石灯籠、狛犬、手水鉢、幟立石）についても、元禄から明治までの神社の変遷を示すもので、さらに、本殿北側に広がる社叢は、神社と周囲の森が一体となった荘厳な景観を形成しており、市内に残る数少ない社叢として貴重なものです。

（平成 22 年 5 月 21 日指定）



大隅神社境内（本殿と社叢）

## 殿田 1 号墳及び荒神西古墳出土遺物

(とのだいちごうふん および こうじんにしこふん しゅつどいぶつ)

殿田 1 号墳は、津山市油木北にある横穴式石室をもつ古墳です。墳頂部には石材採取に伴うと考えられる攪乱坑がみられ、墳丘裾部に土師質亀甲形陶棺の破片が多数散乱していました。平成 19 年（2007）に発掘調査が行われ、直径 14.4m の円墳であることが判明しました。出土遺物は、平成 19 年の調査の際に確認された陶棺 1 基および須恵器（杯蓋、甕）の他、過去に採集された須恵器（杯蓋、杯身）銅鏡、耳環、玉類（勾玉、管玉、切子玉、丸玉、白玉、ガラス小玉）鹿角装刀子などがあります。

また、荒神西古墳は、津山市桑下の椽山古墳群の南斜面に位置する直径約 11m の横穴式石室をもつ円墳です。昭和 52 年（1977）に発掘調査が行われ、土師質亀甲形陶棺 2 基、須恵器（杯蓋、杯身、高杯、平瓶、長頸壺、短径壺）土師器（杯）銅鏡、鉄器類（鉄鏃、鉄釘）鉄滓などが出土しています。遺物のほとんどは、石室内奥壁周辺で出土しており、古墳の年代は、殿田 1 号墳が 6 世紀末～7 世紀初頭、荒神西古墳が 7 世紀中葉頃に位置づけられます。

殿田 1 号墳、荒神西古墳出土遺物のうち、特筆すべき遺物としては銅鏡があります。銅鏡は、無台のものと高台をつけるものがありますが、殿田 1 号墳から採集されたものは、やや腰が張る無台鏡で、底部は丸底です。平面形がやや歪んでいますが、口径は長径 11.0 cm、短径 10.6 cm、器高 3.9 cm で、重量は 132.5 g を量り、口縁部、体部中央および下部に 1 条ずつ沈線が巡るものです。

荒神西古墳出土の銅鏡は、横穴式石室の奥壁付近の床面から出土しており、殿田 1 号例と同様、腰の張る無台鏡で、底部は平底です。口径 11.4 cm、底径 5.8 cm、器高 4.6 cm で、重量は 125.6 g を量り、口縁部および体部中央、下部に 1 条ずつ、また、底部にも 7 条あまりの沈線が巡っています。

この 2 つの銅鏡は、鉛同位体比分析の結果、殿田 1 号墳例に朝鮮半島由来の鉛が含まれ、荒神西古墳例には日本列島産の鉛が含まれるとの分析結果が出ています。また、殿田 1 号墳については直接的な産地の同定には至らないものの、朝鮮半島産の可能性も指摘されています。

殿田 1 号墳および荒神西古墳は、横穴式石室を有し、陶棺を内蔵する小規模な円墳ですが、ともに銅鏡を出土しています。銅鏡が出土した古墳は、全国で 90 例を超えますが、そのうちの多くが東日本に集中しており、県内での出土は 4 例を数えるのみです。銅鏡は、本来列島内での仏教の広がりに伴い伝わり、流通した品であると考えられていますが、畿内から美作地域への仏教文化の伝播、また受容を示すものとして貴重なものということができます。（平成 23 年 1 月 25 日指定）



殿田 1 号墳出土遺物(陶棺・鉄製品を除く)



荒神西古墳出土遺物(陶棺を除く)



銅鏡(左が殿田 1 号墳、右が荒神西古墳出土)